

平成 30 年 12 月 21 日
地 球 環 境 ・ 海 洋 部

2018 年（平成 30 年）の世界と日本の年平均気温（速報） ～世界の年平均気温は春までラニーニャ現象でも歴代 4 位となる見込み～

- 2018 年の世界の年平均気温偏差（速報値）は、1891 年の統計開始以降で、第 4 位の値となる見込みです。
- 2018 年の日本の年平均気温偏差（速報値）は、1898 年の統計開始以降で、第 6 位の値となる見込みです。

世界の年平均気温は、長期的には 100 年あたり 0.73 の割合で上昇しています。その要因としては、二酸化炭素などの温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化の影響と自然変動の影響が考えられます。

2018 年の世界の年平均気温偏差（速報値）は +0.30 で、歴代 4 位となる見込みです。最近 4 年（2015～2018 年）は、すべて歴代 4 位以内となる見込みです。ラニーニャ現象が発生すると、それにやや遅れて世界の平均気温が下降することが知られています。2017 年秋～2018 年春にラニーニャ現象が発生したにもかかわらず、2018 年は過去 3 年に次ぐ高温となりました。

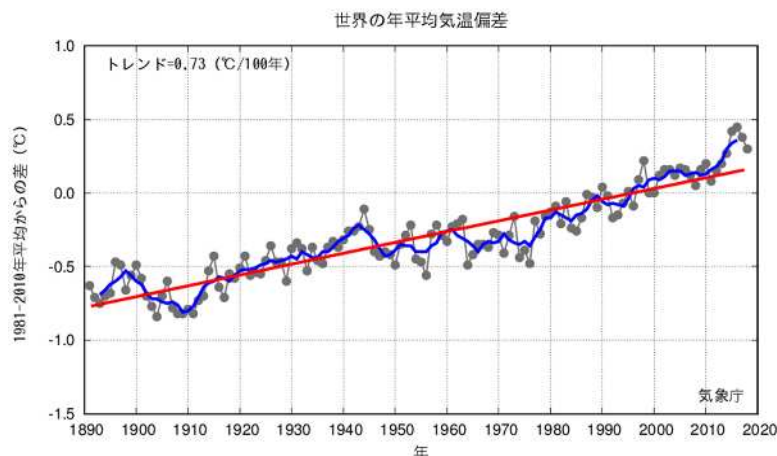


図 世界の年平均気温偏差の経年変化（1891～2018 年）

黒線は各年の基準値からの偏差、青線は偏差の 5 年移動平均値、赤線は長期変化傾向（この期間の平均的な変化傾向）を示す。基準値は 1891～2010 年の 30 年平均値。ただし、2018 年は 1～11 月の期間から算出した値（速報値）を用いている。

確定値は、日本については平成 31 年 1 月初め、世界については平成 31 年 2 月初めにホームページ（下記 URL）で発表します。

<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/temp/index.html>

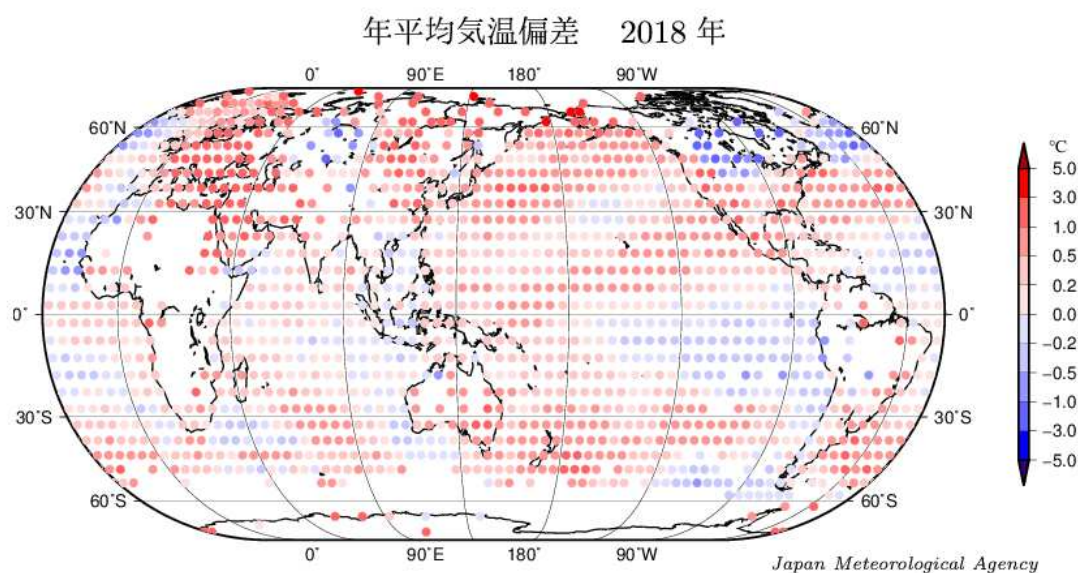
問い合わせ先：地球環境・海洋部 気候情報課 田中・山下
電話 03-3212-8341（内線 2264） FAX 03-3211-8406

2018 年(平成 30 年)の世界と日本の年平均気温(速報)

世界の年平均気温

2018 年の世界の年平均気温偏差(1981～2010 年の 30 年平均値からの偏差)は+0.30 で、統計を開始した 1891 年以降で 4 番目に高い値となる見込みです。また、最近 4 年(2015～2018 年)は、すべて歴代 4 位以内となる見込みです(第 1 位は 2016 年の+0.45)。世界の年平均気温は、長期的には 100 年あたり 0.73 の割合で上昇しており、特に 1990 年代半ば以降、高温となる年が多くなっています(報道発表資料の図)。

2018 年の地域別の気温では、ヨーロッパや東アジア、米国南西部などで高温となったほか、海域では北太平洋を中心に広い範囲で高温となりました(図 1)。また、2018 年の月別では 1～11 月は歴代 7 位以内、季節別でも全ての季節で歴代 6 位以内となりました。



図中の丸印は、5° x 5° 格子で平均した 1981-2010 年からの偏差を示す。

図 1 2018 年の年平均気温偏差の分布図(速報)

各観測点の 2018 年の年平均気温偏差(1～11 月の期間から算出した速報値)を緯度、経度 5 度の領域ごとに平均した値で示す。

日本の年平均気温

2018 年の日本の年平均気温偏差(1981 ~ 2010 年の 30 年平均値からの偏差)は+0.68 で、統計を開始した 1898 年以降で 6 番目に高い値となる見込みです(第 1 位は 2016 年の +0.88)。日本の年平均気温は、長期的には 100 年あたり 1.21 の割合で上昇しており、特に 1990 年代以降、高温となる年が多くなっています(図 2)。

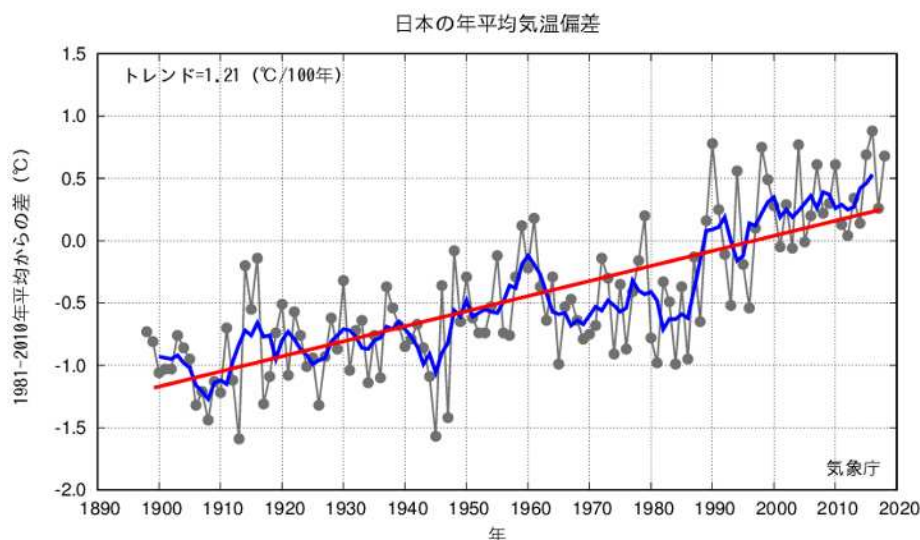


図2 日本の年平均気温偏差の経年変化(1898 ~ 2018 年)

黒線は各年の基準値からの偏差、青線は偏差の 5 年移動平均値、赤線は長期変化傾向(この期間の平均的な変化傾向)を示す。基準値は 1981 ~ 2010 年の 30 年平均値。ただし、2018 年は 1 ~ 11 月の期間から算出した値(速報値)を用いている。なお、日本の平均気温の偏差の算出にあたっては、都市化による影響が比較的小さく、長期間の観測が行われている地点から、地域的に偏りなく分布するように選定した 15 地点(1)の気象台等の観測値を採用。

- 1 網走、根室、寿都(すつつ)、山形、石巻、伏木、飯田、銚子、境、浜田、彦根、宮崎、多度津、名瀬、石垣島

年平均気温の変動の要因

近年、世界と日本で高温となる年が頻出している要因としては、二酸化炭素などの温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化の影響が考えられます。また、世界と日本の平均気温は、エルニーニョ現象やラニーニャ現象などの数年程度から数十年程度の時間規模で繰り返される自然変動の影響も受けて変動していると考えられます。

世界の年平均気温で歴代 1 位の 2016 年と歴代 2 位の 2015 年は、いずれの年もエルニーニョ現象が発生していました。エルニーニョ現象が発生すると、それにやや遅れて世界の平均気温が上昇することが知られています。歴代 3 位の 2017 年は、エルニーニョ現象が発生していない年の中では最も高温の年でした。歴代 4 位の 2018 年は、前年の秋に発生したラニーニャ現象が春まで続きました。ラニーニャ現象が発生すると、それにやや遅れて世界の平均気温が下降することが知られています。2018 年は、春までラニーニャ現象が発生していたことが過去 3 年（2015～2017 年）より低かった一因とみられます。

参考：世界と日本の年平均気温の順位(上位 10 位まで)

2018 年の世界と日本の年平均気温偏差は、1～11 月の期間から算出した値(速報値)を用いている。

世界 (2)			日本		
順位	年	気温偏差 ()	順位	年	気温偏差 ()
1	2016	+0.45	1	2016	+0.88
2	2015	+0.42	2	1990	+0.78
3	2017	+0.38	3	2004	+0.77
4	2018	+0.30	4	1998	+0.75
5	2014	+0.27	5	2015	+0.69
6	1998	+0.22	6	2018	+0.68
7	2013	+0.20	7	2010	+0.61
	2010	+0.20		2007	+0.61
9	2005	+0.17	9	1994	+0.56
10	2009	+0.16	10	1999	+0.49
	2006	+0.16			
	2003	+0.16			
	2002	+0.16			

2 世界の平均気温偏差の算出方法については、以下のページをご覧ください。

https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/temp/clc_wld.html